

研究報告

愛知県現任保育士指導者養成研修「乳児救急」の講義と演習の評価

山田恵子

中部大学生命健康科学部スポーツ保健医療学科

要 旨

平成 22 年 10 月 29 日に碧南市の保育所で発生した乳児の窒息死亡事故を教訓に、愛知県は保育士指導者研修の中に乳幼児の救急に関する講義・演習を盛り込むことを検討し、平成 25 年度の研修の一部に「乳児救急」が入ることとなった。筆者は小児救急看護を研究テーマに持つ研究者であることから、講師として講義・演習の依頼を受け実施することとなった。研修は現任保育士 95 名に対し、小児看護学研究者 3 名（うち AHA/BLS プロバイダ資格保持者 2 名）と現職の救急救命士 1 名（現在、派遣講師の職にある）で実施した。ベビーアン、レサシベビー、リトルアンなどのシミュレーターと 2 種類の AED を準備し、講義 60 分、演習 100 分の構成で実施した。受講者の調査結果から、乳児救急の理解や救急蘇生の必要性については 90% 以上が「理解が深まった」や「理解できた」と答えていた。一方、乳児だけでなく「幼児についても知りたい」、「ケガや病気の対処法も知りたい」など、救急蘇生だけでなく、ケガの応急手当や病気時のホームケアについてのニーズも聞かれた。保育所の子どもの健康管理を行う上で、小児看護や救急看護に精通した看護師による保育士への教育的支援は重要な社会的役割であると考えられた。

1. はじめに

核家族の増加や共働き、祖父母が近隣に不在という現状から、乳幼児を保育所に預ける家族が増加し、乳幼児の生活の場が自宅から保育所へシフトしている傾向がある。乳幼児の不慮の事故は 70% が家庭内で起きているが、保育所や学童保育においても防ぎ得た傷害（injury）による死亡事案が報告されており（厚生労働省, 2013）、保育施設における安全は脅かされつつある。乳幼児の生活する場における安全対策や事故発生時の対応は、乳幼児の健全な成長・発達を育むため保健医療職が取り組むべき重要な課題であるといえる。

今回、愛知県現任保育士研修運営協議会より、中堅クラスの保育士指導者研修として「乳児救急」に関する講義・演習の講師依頼を賜った。毎年 4 日間の研修が行われているそうだが、平成 22 年 10 月 29 日に碧南市の保育所で発生した乳児の窒息死亡事故を教訓に保育士指導者研修の中に乳児や幼児の救急に関する講義・演習を盛り込むことが検討され、愛知県内で働く保育士 2000 人への質問紙調査からも実施を望む声が多く聞か

れ、研修内容の一部に入ることとなった。

筆者は、保育士への小児一次救命処置（Pediatric Basic Life Support : PBLS）教育は直近の課題であると考えており、事故予防（Injury Prevention）と事故発生時の対応はセットにして乳幼児に関わる全ての人に啓発されるべきであると考えている。しかし、筆者が保育士 262 名に実施したアンケート調査では、保育士の一次救命処置講習受講状況は 51.9% と半数程度であり（山田, 2012）、受講内容は消防署が実施する普通救命講習が 66.9% であった（山田, 2011）。普通救命講習は成人を対象とした講習内容であるため、乳幼児を対象とした小児一次救命処置教育が必要である。消防庁は 2013 年 4 月より、普通救命講習Ⅰ、Ⅱに加え、小児や乳児を対象とした普通救命講習Ⅲを新設した（総務省消防庁, 2011）。受講者が増加することを望むが、保育士や乳幼児を持つ保護者にとって、「受講する」という行動に移すためのハードルがまだまだあるように思う。

今回、初の取り組みとなった保育士指導者研修「乳児救急」において、講義・演習の評価から、

看護師による教育的支援の社会的役割を明らかにすることを目的に調査を行った。

2. 研究方法

1) 研究対象者

愛知県現任保育士指導者研修「乳児救急」を受講した愛知県内の保育士 95 名

2) 研究期間

2013 年 8 月

3) 研究方法

質問紙法による量的記述的研究。基本情報 4 項目と研修内容「小児救急」に関する 11 項目で 4 段階のリッカート尺度を用い単純集計を行った。質問の意味や解答のしやすさなどを研修に参加した講師間で検討・修正した。対象者からの要望などを聞き出すため、自由記述欄を設け自由記述についてもできるだけ生の声としてまとめた。

4) 倫理的配慮

運営協議会および研究対象者に研究の主旨、参加による自由意志の尊重、匿名性の確保、解答をもって同意とする旨を口頭で説明した。質問紙回収は運営協議会の協力を得た。

3. 愛知県現任保育士指導者養成研修「乳児救急」

1) 研修日時

平成 25 年 8 月下旬 4 日間の研修のうち
「乳児救急」は 4 日目の午後 180 分(2 コマ)

2) 研修受講者

愛知県内の現任保育士 95 名

3) 研修講師

小児看護学研究者 3 名
(うち AHA/BLS プロバイダ資格保持者 2 名)
現職の救急救命士 1 名(現在、派遣講師の職にある)

4) 研修で使用したシミュレーターおよび AED

ベビーアン 16 体、レサシベビー 4 体、リトルアン 4 体
AED トレーナー: Frx4 台、日本光電 4 台



5) 講義内容

愛知県「保育所事故対応指針」の概要<保育所編>

1. 事故の未然防止のために 2. 事故への対応 3. 再発防止のために、を踏まえ講習を実施した。

60 分	保育所とリスクマネジメント 乳幼児の発達と起こりやすい事故 不慮の事故による死亡事案 保育施設での事故 SIDS について 傷害予防(Injury Prevention)から傷害管理 (Injury Control)へ
------	---

6) 演習内容

受講者 23~24 名に対し講師 1 名の 4 ブースを設置。
各ブース、ベビーアン 4 体、レサシベビー 1 体、リトルアン 1 体、AED トレーナー Frx 1 台、日本光電 1 台を準備した。普通救命講習ⅢDVD の一部を使用(使用許可を得た)。ただし、終了証発行せず。

5 分	乳児の心肺蘇生法について説明
10 分	安全確認、反応の確認 助けを呼ぶ(人を呼ぶ、119 番通報、AED)
15 分	呼吸の確認、胸骨圧迫(二本指)
15 分	人工呼吸(口対口鼻)
20 分	反応の確認～ 胸骨圧迫 30 回+人工呼吸 2 回
10 分	異物除去 背部叩打と胸部突き上げ法 2 セット
25 分	AED の操作方法について



二本指による胸骨圧迫の演習

掲載許可済み



背部叩打法の演習

掲載許可済み



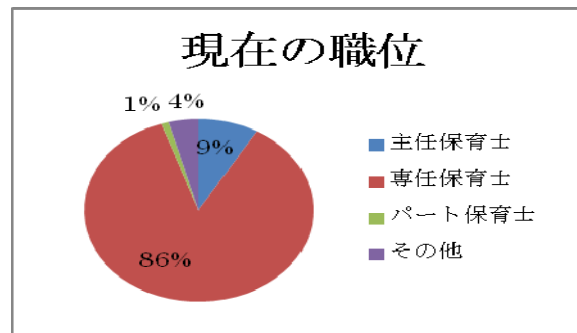
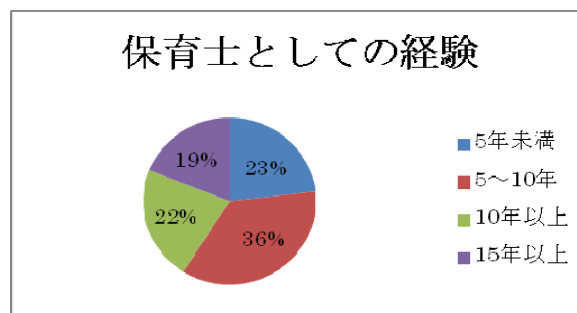
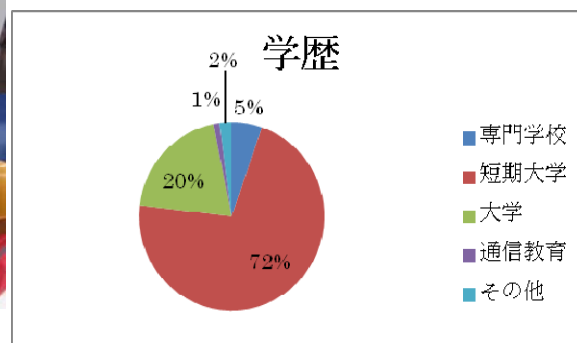
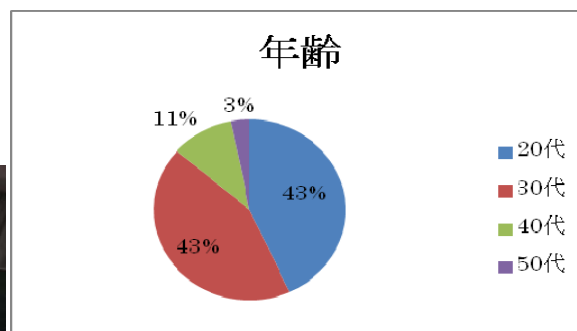
AEDトレーナー小児用キーの説明

掲載許可済み

4. 結果

1)受講者の背景

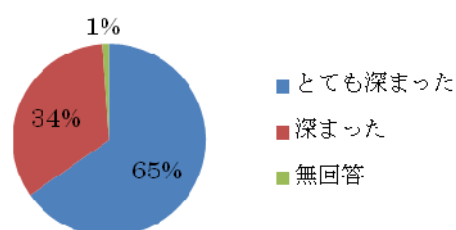
年齢は「20 歳～30 歳代」が 80%以上を占めた。学歴は「短大卒」70%程度、「大卒」20%であった。保育士としての経験は「5 年未満」約 20%、「5～10 年」約 40%、「10 年以上」40%程度であった。現在の職位は「専任保育士」約 90%、「主任保育士」約 10%であった。



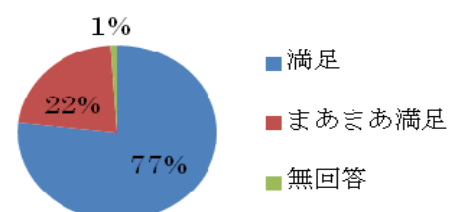
2)受講内容の理解および満足度

乳児救急の理解については、「とても深まった」65%、「深まった」34%であった。講習会の満足度は「満足」77%、「まあまあ満足」22%であった。講習会の難易度はほぼ全ての受講者が「適当」と解答した。職務に活かせるかについては、「とても活かせる」79%、「まあまあ活かせる」21%であった。配布資料については、「大変よい」47%、「よい」44%であった。講師の説明と進行は、「大変よい」63%、「よい」32%であった。成長発達と事故の特徴の理解は、「理解できた」75%、「まあまあ理解できた」24%であった。救急蘇生の必要性については90%以上が「理解できた」と解答した。乳児の救急蘇生、異物除去、AED 使用についても80%程度が「理解できた」と解答した。

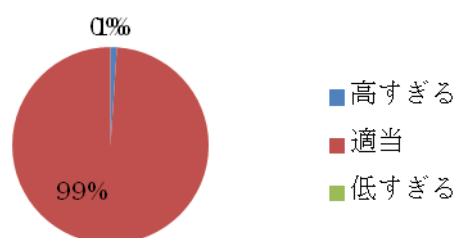
乳児救急の理解



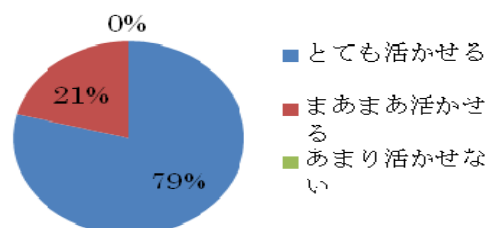
講習会の満足度



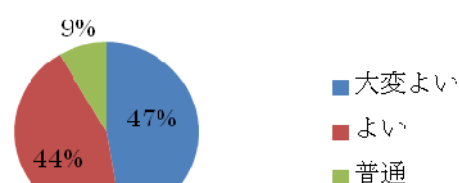
講習会の難易度



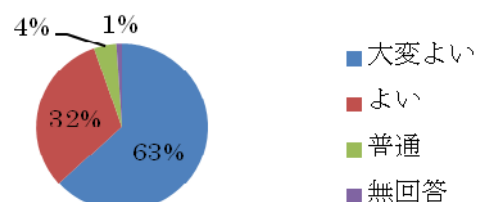
職務に活かせるか



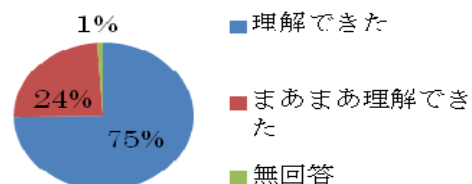
配布資料の内容



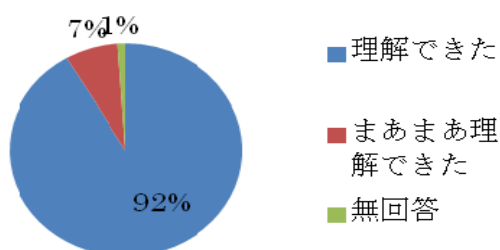
講師の説明と進行



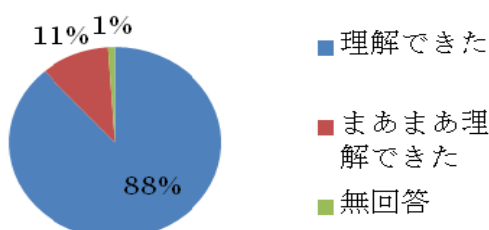
成長発達と事故の特徴の理解



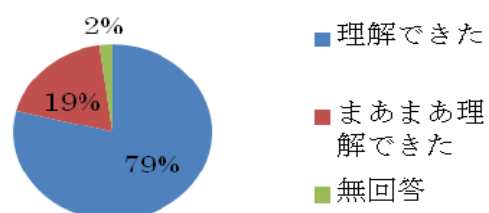
救急蘇生の必要性



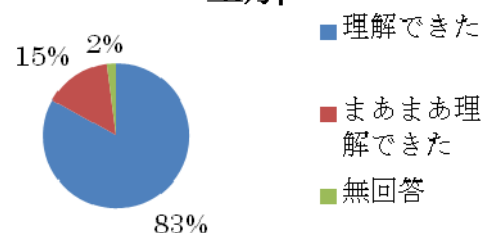
乳児の救急蘇生の理解



乳児の異物除去の理解



乳児へのAED使用の理解



3)自由記述内容 25の記述から抜粋

本講義に対する意見や要望について

「2年に1回心肺蘇生は学ぶが乳児は話だけなので体験できてよかった」「1歳からの方法も教えてほしい」「職員に伝え、皆が対応できるようにしたい」「実技だったのでわかりやすかった」「子どものいのちを預かっていると感じた」「とてもわかりやすかった、繰り返し練習して身につけたい」「保育所の皆に教えてあげたい、事故のない保育所を目指す」「種類の違うAEDを見てよかった」「自分の責任を感じることができた」「幼児についても知りたい」「ケガや病気などの対処法、どんなことが危険なのか勉強できると嬉しい」「全員、実践できてよかった」

5. 考察

1)保育士への「乳児救急」研修の成果

愛知県内の中堅保育士研修ということで、「20歳～30歳代」の方が大半であった。また、保育士経験も「5年以上」が80%近くを占めていた。現在、専任保育士として従事されている方がほとんどであり、研修への意識も高いと考えられた。講習会の難易度は大半の方が「適当」と解答されていた。乳児に関しては成人と方法が違うため、演習時間を要すると思い今回は乳児に限定したが、スムーズに進行し時間的に多少の余裕もあったことや、自由記述に「幼児の方法も学びたい」という希望もあることから、次回は、片手での胸骨圧迫やハイムリック法なども演習に組み込めると考えられる。配布資料に関しては、字が小さいなどの指摘があったため工夫が必要であると感じた。成長発達と事故の特徴の理解は24%が「まあまあ理解できた」と解答しており、一方的な講義であったため、普段の保育所でのヒヤリ・ハットを取り上げて考えるなど双方向的な講義形式を工夫する必要があると考えられた。Dale, E(1970)によれば、聞いたり見たりしたことは、2週間後に20～30%しか覚えておらず、討論に参加するなど能動的に関わった知識は2週間経過後でも70%程度覚えているといわれている。しかし、討論形式は時間を要するというデメリットもあるため、講義の中で質問や解答を求めるなど、受講者参加型の講義形態を工夫する必要があると考えられる。乳

児の蘇生や異物除去、AED については 80%以上が「理解できた」と解答しており、演習で実際に体験したことが理解の向上に役立ったと考えられた。

2)保育士への「乳児救急」研修の意義

2010 年 7 月に改正された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準」によると、子どもの保健Ⅰ・Ⅱの中で健康問題における講義・演習のカリキュラムが組まれているが、救急蘇生や応急手当については、指導者の人員不足や設備の問題などから、十分な教育が必ずしも行われているとは限らないようである。現任保育士に行った調査結果においても、保育士養成機関で救命講習について学んだ割合は 16.5%と低く、保育所に勤務してから普通救命講習を受講している傾向がある(山田, 2011)。保育所職員が対象とするのは乳幼児であるため、乳児や幼児の身体的特徴や認知的発達の特徴を踏まえた事故予防や対応の視点が必要となる。「乳幼児の救急はおとなのついでに学べるものではない」というのが筆者の持論である。月齢が低ければ低いほど、リスクも高くなり、万が一の対応も簡単ではない。2012 年度の保育施設における死亡事例は 18 名、そのうち 10 名が 0 歳児つまり、乳児であった(厚生労働省, 2013)。このことから、保育士研修として「乳児救急」を学ぶ意義は大きいと考えられる。今回の調査結果においても、「*幼児についても知りたい*」「*子どものいのちを預かっていると感じた*」「*自分の責任を感じることができた*」「*ケガや病気などの対処法、どんなことが危険なのか勉強できると嬉しい*」など、小さいいのちを預かることの重責と健康問題における対応を積極的に学びたいと考える保育士の方々の声を聞いたことは大きな収穫だろうといえる。

3)看護師が担う保育士への教育的支援

保育士において本務となるのは入所する乳幼児の保育であり、成長発達を促すような健康的で安全な保育環境を整えることが責務であろう。しかし、乳幼児はその発達の特徴から自分で自分の身を守ることができず、好奇心旺盛なことから、動ける範囲にどこまでも行ってしまうし、何でもとりあえず口に入れてしまう。乳児期は特に昨

日できなかったことが今日できるといった発達の著しい時期にあるため窒息や転落といった事故のリスクも高い。こういった事故に限らず、小児感染症や胃腸炎、インフルエンザなどの日常的に起こりやすい病気にも罹患しやすいのが乳幼児の特徴といえよう。そのため、保育士は保育だけでなく保健という形で乳幼児の病気や事故について学ぶ。しかし、保健というのはそもそも予防教育、健康管理といった分野であり、病気や事故が起きないようにどうするかということが主となる。上記にあげた感染症や小さなケガなどは保育所では日常茶飯事であろう。病気や事故が起きたら病院に行く前に手当てが必要となる。この部分は看護の領域に入ると筆者は考えている。例えば、熱が出れば安静にして暖かくする、お熱を測る、他の辛い症状がないか観察するというのは看護であろう。また、ケガをしたらきれいに流水で洗い流し保護すること、傷口の程度やどんな所でけがをしたかによっては病院に受診し化膿しないように手当をしてもらう。この点は医師の診断・治療の範疇である。では、何か口の中に物が詰まって窒息しかけているような時は異物除去や場合によっては今回の研修で行った救急蘇生を実施しなければならない。今回の研修は乳児救急ということであったが、「*幼児についても知りたい*」と要望があったように、乳幼児の事故や病気の予防と対応という広い視点で教育される必要がある。この教育的支援を小児看護や救急看護に精通した看護職者が担う必要があると考える。WHO では“事故”を Accident (偶発的に起こった事象)ではなく、Injury (予防可能であった事象) = “傷害”と捉え、子どもの不慮の事故は予防可能であるという視点に立ち、傷害予防 (injury Prevention) の取り組みを促進し不慮の事故による死亡率減少を呼び掛けている (WHO, 2005)。筆者は、傷害予防 (injury Prevention) + 傷害管理 (injury Control) を含めた広い視野での不慮の事故死予防教育を提案したい。病気の予防 + 発熱時のホームケア、ケガの予防 + ファースト・エイド、誤嚥の予防 + 救急蘇生という具合に“起こってしまった時の対処法”を組み込まなければ、尊いいのちの火が消えてしまう可能性があるからである。そして、このような教育的支援の役割を果たせるのは小児看護や救急看護に精通した看護職者だと考える。特に小児救急認定看護師や救急看護認定看護師な

どは、病院の中に留まらず、救急外来を受診する小児患者や家族への指導、日常的健康問題や対応についての指導、一般の方への救急蘇生や応急手当の普及などの役割も課せられている。筆者自身は認定看護師ではないが、小児救急看護を専門とする大学教員ということで今回の研修の講師を仰せつかった。このように看護の立場で病院以外でも専門性を発揮するニーズは今後高まると考えられる。そのニーズに応えられるよう、看護師による教育的支援の充実を図っていきたい。

6. 結論

「乳児救急」の研修において、看護職者による保育士への教育的支援は社会の要請に応えられる重要な役割であると考えられた。

7. 謝辞

本調査にご協力いただいた保育士の皆様、愛知県現任保育士指導者研修運営協議会諸先生方、演習の協力をいただいた中部大学生命健康科学部助教畑中めぐみ先生、助手西村貴史先生に深謝申し上げます。

引用文献

厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課 (2013) .

保育施設における事故報告集計.

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002sw6v-att/2r9852000002sw8c.pdf>

(閲覧日 : 2013 年 8 月 2 日)

山田恵子 (2011). 小児一次救命処置における現状と課題の検討ー保育士への小児一次救命処置教育を踏まえてー, 医学と生物学 155 (9)

山田恵子 (2012). 乳幼児の小児一次救命処置に対する保育士の認識と現状, 日本小児看護学会誌 21 (1)

総務省消防庁 (2011). 応急手当の普及啓発活動の推進に関する実施要綱の一部改正に伴う留意事項について.

[http://www.fdma.go.jp/emergency_rescue/kyukyukyujotuchi/2011/20110831-2.pdf](http://www.fdma.go.jp/emergency_rescue/kyukyukyu_kyujotuchi/2011/20110831-2.pdf)

(閲覧日 : 2013 年 8 月 2 日)

Edgar Dale (1970). Audiovisual Methods in Teaching, Holt, Rinehart & Winston of Canada Ltd; 3rd Revised 版

World Health organization (2005). Child and adolescent injury prevention: a global call to action, Natureinterface Co. Ltd.

Title: 愛知県現任保育士指導者養成研修「乳児救急」の講義と演習の評価

Author(s): 山田恵子

Address(es): 中部大学生命健康科学部スポーツ保健医療学科, 愛知県春日井市松本町1200

Keywords: 乳児救急, 保育士, 看護師, 教育的支援